第10回「半島の現代美術」展

AWA BIENNALE 2012

～半島の海・街・森～

海

鴨川市民ギャラリー

10/10（水）～10/16（火）

9:00～17:00

※初日のみ12:00～　※10/15（月）休館日

街

旧千葉県立安房南高等学校

（第10回・特別展）

10/19（金）～10/21（日）

10:00～16:00

※電気・水道・トイレが使えません　※仮設トイレ有

森

芸術の森（富津）

10/25（木）～10/31（水）

10:00～16:00

旧千葉県立安房南高等学校木造校舎の活用を考えるシンポジウム

10/20（土）　13:00～　旧千葉県立安房南高等学校2F・旧職員室（入場無料、参加型イベントです）

主催　安房ビエンナーレ協会

後援　鴨川市教育委員会　館山市教育委員会　南房総市教育委員会　鋸南町教育委員会　安房ビエンナーレHP　http://www16.ocn.ne.jp/~awabien/index.html

第10回「半島の現代美術」展　安房ビエンナーレ2012

～半島の海・街・森～

今回の展覧会は10回展となる。足かけ20年になる。その間社会は変化し続けている。ここ房総でも20年前に比べると大きく変わっている。東京湾アクアライン・館山道の開通、大型マンション・老人福祉施設の建設、大型店舗の参入、海岸線の護岸建設、小学校・中学校・高等学校の統廃合による数の減少、等々。人・風土・文化等が、変化することがまずいわけではない。何か落とし物は無かったか、忘れ物は無かったか、と気づくこと、そしてそれを拾うこと。

そういう意味で今回は総括的なテーマである。過去のテーマと重なる部分が出てくるだろう。

●鴨川市民ギャラリー

『市民の生活に身近な場所で、作品の発表・鑑賞の場を提供し、地域に根ざした芸術・文化の発展の拠点であるとともに、気軽に利用できる施設として活動を続けています。

1階は鴨川市出身の彫刻家・長谷川昂の木彫作品（約30点）を常設展示。2階では、団体・個人が作品発表・展覧会を行う。また、市民ギャラリー主催による企画展・特別展も開催。』

と、千葉県の美術館の案内として紹介されている。安房の地域で公営の唯一のギャラリーでもある。私たちのこの展覧会も、第1回展から鴨川を拠点とし、このギャラリーもキーステーションとして活用してきた。

●旧千葉県立安房南高等学校（木造管理棟校舎）

明治40年　安房郡立女子技芸学校として開校（千葉高女に次ぐ高等女学校を目指して設立）。
明治42年　安房郡立高等女学校と校名変更。（明治42年長須賀に校舎新築）
大正10年　千葉県立安房高等女学校となる。（大正12年　関東大震災で校舎はほぼ全壊）
（昭和5年　現在地に校舎移転）（昭和13年　この地を「ひかり野」と命名）
（昭和16年　太平洋戦争始まる。昭和20年　校舎が日本建鉄疎開学校工場となる。）
昭和23年　千葉県立安房女子高等学校となる。
昭和25年　千葉県立安房第二高等学校と校名変更。
昭和36年　千葉県立安房南高等学校と校名変更。
（平成7年　木造管理棟校舎が千葉県指定有形文化財に指定される）
平成20年　千葉県立安房高等学校と統合。（現在、この校舎は使われていない）

貴重で膨大な校史関係資料が保存されており、安房地域女子の最高学府としての輝かしい歴史と伝統を持つ。創立百年史の中に、千葉大学工学部教授の玉井哲雄氏が「安房南高校の木造校舎の特徴を『建物の基礎から軸部、柱梁構造ですね、そして屋根に至るまで最新の技術を使って堅牢に作られています。（中略）生徒さんたちが日常の清掃などを通じて建物を守ってきた』と校舎の堅牢さと保存状態の良さを指摘している」と書かれている。この木造校舎全館を使っても展開される。

●芸術の森（富津）

内房線の佐貫駅から、しばらくひらけた田んぼの道沿いを走り、小高い山沿いの細い道を行くと海岸線近くの最後の集落地の一つが目的地である。そこには、オーナーの浜本氏の自宅があり、東側にマテバシイの林が広がっていて、その中に手作りの小さな美術館がある。また林の北側には広場があり、舞踏の披露等が行われたことがあると聞く。また南側にはきれいな水の川が緩やかに流れている。敷地を出て、西側に歩いて行くと直ぐ海岸に辿り着く。海からの強風にあおられて曲がった背の低い木々の間を抜けると、きれいな芝生のような草の生えた広場が広がり、その上に東京湾が広がっている。遮るものは何もない。浸食の為か護岸されてはいるが、絶壁の為全く目に入らない。ここがもう1つの会場である。

以上、自治体の運営する鴨川市民ギャラリー、個人が運営する芸術の森（富津）、全く手の入れられていない旧安房南高校木造管理棟校舎、それぞれの異なる3つのパターンに私達が関わりを持ち、今回の展覧会を開催することになった。

それぞれその3つは、存在自体に意味を持っており、特に学校は、地域毎の街の中心の場所にあり、清水の浸み出し口のごとく文化の発信地として存在した。それ故に、そこに関係した人々の思いは強烈で範囲も広い。だから、学校という場所での展開は、誰もが通学した経験があって、在学時の記憶を呼び起こしやすいという利点がある。その反面、鑑賞者の視線が黒板や机などに移ろうため設置された作品に集中することが難しい事もあるだろう。

廃校を使っての美術展が各地で行われているが、その多くがアートが一時的かつ部分的にハードとしての校舎に充填されるというのが実情のようだとも聞く。国や地方自治体でもどうしようか悩んでいるようだ。廃校となった施設等活用事例リンク集～アート創造拠点などの文化施設～として、文部科学省からもいくつか紹介されている。

「『商店街を盛り上げてよ』という話も沢山来るんですが、ただそれはすごく難しくて、『結局何をやりたかったんだろう』とならないために、『これが何のためになるのか』『どういう面白味があるのか』をちゃんと自分で理解して始めないとやっても意味がないと思うんです」吉祥寺にアートセンターを構えて活動する小川希氏があるインタビューの中で述べている。

今回、そこに私たちはどう関わっていくのか。幸いなことに、その3カ所はそれぞれ重たい思い入れと歴史を持っている。そしてそれを踏まえて関わること、必要とあれば、その再生を探ること、ができる。

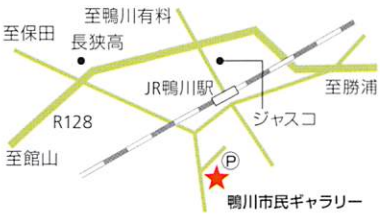
学校としての役目を終えた施設をどのようにすれば文化的に活用できるのか。廃校という、1度ピリオドを迎えた場所が再度、新たなエネルギーに満ちあふれる場所となるのか。子供の減少という地方自治体が目下の所直面しているこの問題に、今回の展覧会が1つの有効な解答を与えることができるのか。探っていきたい。

最近、気候の変化で、海で亜熱帯の魚が上ってきている、昆虫もそれに近い、と聞く。海温の上昇は海だけではなく地上にも影響を及ぼす。それは作物の収穫を含め植物体系にも影響を及ぼす。有効な森林資材活用のためと植林された杉林が放置され荒れている。昔活用された竹も使われなくなり、竹林も荒れている。

まだこの安房の地にはマテバシイを代表する森があり、その間に街があり、海も青い。

あまり縛られることの少ない自由さがアートにはある。そのアートが、この半島で、海と街と森で一体化できたらいい。

鴨川市民ギャラリー



〒296-0001　千葉県鴨川市横渚893
TEL.04-7093-2366

旧千葉県立安房南高等学校

〒294-0045　千葉県館山市北条611

芸術の森（富津）

〒293-0057　千葉県富津市亀田1237
TEL.0439-66-0936

出品作家

鴨川市民ギャラリー

石川仁
今井茂淑
宇梶静江
岡部公英
勝田徳朗
吉良康矢
柴﨑孝雄
杉山春信
中村岳
畠山修
浜本義行
穂積節夫
真魚長明
三浦健一
水上順義
山口マオ
吉田友久
ローレンス・ハッフ

旧千葉県立安房南高等学校

石川仁
今井茂淑
今井俊
宇梶静江
岡部公英
勝田徳朗
吉良康矢
柴﨑孝雄
中村岳
畠山修
浜本義行
船田正廣
穂積節夫
真魚長明
三浦健一
水上順義
宮下昌也
山口マオ
吉田友久
千葉大学岡部研究室
旧千葉県立安房南高等学校OG
特別参加予定
いとうまりこ（人形劇）
里見香華（里見流家元）
島田順子（ファッションデザイナー）
せんぼんよしこ（映画監督）
田村洋子（書家）

芸術の森（富津）

勝田徳朗
柴﨑孝雄
浜本義行
水上順義